

実践報告

全学部を対象とした「日本語学習サポート」の取り組み

福岡昌子（留学生センター）・藤本久司（人文学部）・別府直苗（教育学部）

Activities of 'Japanese study support' for all-campus international students

FUKUOKA Masako • FUJIMOTO Hisashi • BEPPU Naoi

<Abstract>

We have launched 'Japanese study support program' for the international students of all faculties in Mie University, by cooperation of teachers in charge of them in Center of International Students, Humanities, and Education.

'Japanese study support' means that each Japanese student helps a paired foreign student to study Japanese for arranged 90 minutes a week as a volunteer. The contents of support depend on the request of the foreign students, and are mostly the skill up of conversation, Kanji, report writing, reading, and listening.

In this report we will mainly describe the contents of the support, the activities and details of the program, the skill study of Japanese students, and the rules of the support, and then exam the problem of the program to be solved in the future.

キーワード：日本語学習支援、留学生、日本人学生、日本語教育の指導、ボランティア

1. はじめに

近年、学位取得のために長期にわたって日本に滞在する留学生が増加している。一般に、文系を専攻する留学生は日本語能力が高いとされるが、日本語文献の講読、論文やレポートの提出、日本語による日本人学生との討論など、さらに高い日本語能力が必要とされる。一方、理系の学生は時に英語での指導が行われ、英語での論文執筆が認められているものの、日本人との交流や日常生活のための日本語の習得は必要不可欠となっている。

国立大学にはチューター制度があり、留学生が大学に入ってから1年間は日本人大学生がチューターとして留学生の勉学を支援することになっている。しかし、この制度は留学初期における制度であるため、いざ学位論文執筆の段階になって語学面でのサポートが必要となるときにチューターは使えないということがよくある。学生一人一人のニーズに応じた日本語の語学支援は各大学で独自に行っていく必要がある。

本学における日本語の語学支援は留学生センターや各学部の留学生担当教官が中心となっ

で行っているものの、個別にその支援を必要とする留学生に対しては、十分な語学支援体制が整っているという状況ではなく、実際に多くの留学生から語学支援を切望する声も高かった。

そこで、従来独自に学生によるサポート活動を行っていた、留学生センター、人文学部および教育学部の教官が連携し、全学部の留学生を対象にした日本語学習支援として「日本語学習サポート」体制を構築することにした。

本研究では、本学における日本語学習支援体制である「日本語学習サポート」に関する取り組みを紹介し、その具体的な活動について報告すると共に、今後の日本語学習支援のあり方について検討を行いたい。

2. 日本語学習支援体制「日本語学習サポート」までの経緯

2-1. 留学生センター

現在、留学生センターには3つの日本語教育プログラム（日本語研修留学生プログラム⁽¹⁾、日韓理工系学部留学生プログラム⁽²⁾、日本語・日本文化研修留学生プログラム⁽³⁾）と、日本語教育コースがある。一般日本語教育コースは、レベル判定試験の結果に基づき初級集中（日本語研修）A、初級集中（日本語研修）B、初級基礎Ⅰ、初級基礎Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級のコースに分かれている。この一般日本語教育コースの他には、夏期および春期の大学休業期間に開講される日本語特別補習講座や地域在住外国人のための日本語講座が行なわれている。

留学生センターの一般日本語教育のコースは、本来、本学に在学するすべての留学生が必要と日本語能力に応じて受講できる。しかし、専門の授業と留学生センターの授業が重なっている者、渡日が遅れた者、日々実験等で追われて受講する時間が取れない者など、留学生センターの授業を受講したくても、様々な事情で受講できない留学生が多いというのも現状である。

留学生センターにおける日本語学習の支援体制は、本稿で述べる現体制以前に、98年から留学生相談部門においてこの日本語学習支援プログラムが始められていた。ボランティアで留学生に日本語のサポートをしてみたい日本人学生と日本人学生に日本語を教えてもらいたい留学生を募り、日本人学生と留学生が週90分程度それぞれの都合の良い時間を選び、学習サポート活動を行うという現体制と同じものである。基本的にカンパセション・パートナーとしての日本語学習サポートを目指すものであった。このプログラムについては、留学生センターのHPでも紹介され、小規模ではあったが、ボランティア日本人学生による全学部に向けた日本語学習支援が行なわれていた。しかし、留学生センターの

留学生相談部門における様々なプログラムと平行的に日本語学習支援体制を整えていくのは難しく、日本語指導という点からも日本語担当部門の教師が中心となって活動を行っていった方がよいのではないかという問題点が挙げられていた。

このような中で、03年度より福岡が日本語学習支援プログラムを引き継いだ。と同時に人文学部と教育学部の留学生担当教官に連携体制の要請を図ったところ、折良く同意が得られたため、このプログラムの推進を目指すことが可能となったのである。しかしながら、全学部の留学生を対象とした「日本語学習サポート」プログラムの更なる充実・発展のためには、プログラムの宣伝活動、日本人学生と留学生との交流パーティーの企画・実施、掲示やHP等を見て来てくれる日本人学生への説明、日本人学生への勉強会の企画・実施、個々のペアに対する学習内容の整備・指導など積極的に展開する必要があった。また、日本人学生を持たない留学生センターにとって、ボランティア日本人学生による組織化をどう進めていくかも検討課題であった。言うまでもなく、これらの課題解決を図りながらの活動開始であったが、授業以外に個々の留学生のニーズに合った日本語指導を実現できる体制として、この学部の留学生担当教官と共同による日本語支援体制は、今後大学全体の留学生支援の見直しという点から見て、非常に時期的によりプログラムであったと言える。

2-2. 人文学部

人文学部では、98年6月、当時の留学生相談室担当教官の呼びかけで、留学生の日本語学習支援を行うことを目的に日本人学生6名が集まり活動を開始した。様々な理由により留学生センターでの授業だけでは日本語のレベルが上達しない者、通常のペース以上に上達の必要に迫られている者などを対象に、学内の空き教室を利用して原則として週90分、留学生の希望する内容に沿ってボランティアで日本語学習を手助けするというものであった。当初は人文学部の日本人学生が人文学部の留学生をサポートするのが主であったが、同年9月から双方に他学部の希望者が加わり、以降全学部を対象とした活動に拡大していった。学習サポートは各班が別々に行うため、週1回のミーティングを開催し、進行状況の報告やサポート上の疑問点などを話し合った。活動は学習支援だけにとどまらず、話し合いの中から、年数回のパーティーや鍋会、日帰り研修、スポーツ大会、英会話の会など、全体的な交流イベントも熱心に行われるようになった。99年11月の時点で日本人学生のメンバーは44名を数えており、この年、学生たちが話し合ってグループ名を「てらこや」と名づけた。

学内のボランティアグループとして継続していた「てらこや」であったが、2000年、イベントなどを行う際の手続きをきっかけに、サークルとしての登録の必要性が生じ、学

生課に団体結成届けをした。このことから、新入生のサークル紹介冊子に掲載され、新入生がそれを見て新たに入会してくるという状況が生まれ、3組織が合流し新体制となった現在も引き続き、新メンバー加入の1つのきっかけとなって続いている。

02年4月、「てらこや」を立ち上げた前任教官が他大学へ異動し、藤本が「てらこや」の顧問的立場を引き継いだ。同年前期の間に約20名の日本人学生がグループに加わり、活動は継続可能となった。この時点でグループ発足時のメンバーの多くは卒業していたが、数人が大学院に在籍し、また「てらこや」命名時の者が数名4年生として残っていた。彼らは「てらこや」活動の趣旨や精神を熱心に後輩に伝え、新たなメンバーもその期待に応じてそれぞれの班のサポート内容を充実させ、メンバー間の親睦を図るため楽しみながら四季のイベントを実施し、学部の垣根を越え留学生との相互理解に努めていった。日本語の教え方についての自主的な学習会にも多くのメンバーが熱心に参加した。専門的な技能を持った学生の加入も手伝い「てらこや」ホームページやメンバーのメーリングリストが開設され、留学生と日本人学生混合の英語暗記会グループも生まれた。現在の拡大したサポートグループ、新「てらこや」の基礎が再構築されていた1年であったと位置付けてよいのではないだろうか。

なお、こうした活動が継続し留学生の間に情報が広まるという流れの中で、1つの問題が生まれる。従来「てらこや」では立ち上げの経緯から、ある程度日本語が‘できる’学生を対象に描き活動の主流としてきた。しかし、学部やコースによっては日本語レベルが十分でなくても学部生、院生として在籍することが可能で、かつ各学部の研究生の日本語レベルは多様である。レベル的には完全な初心者または初級に属する者が、日本語学習サポートを希望してくることがあり、その増加の可能性が考えられるようになってきた。その意味で、人文学部留学生相談室を拠点に全学を対象に行ってきた日本語サポートは、03年度に向け何らかの新たな対応を要する時期が来ていたと言える。

2-3. 教育学部

教育学部では、留学生担当教官を1年間採用しなかったため、留学生指導に空白期間が生じ、専門の学問については、その研究方法や調査方法、さらに情報収集や科学技術等々を具体的に指導する「指導教官」がいたが、専門に入る前段階における日本語力の不足する「研究生」については、ほとんど留学生本人の自主的な努力に任せられていたというのが実状であった。

しかもここ数年、留学生の大半は研究生であり、さらに、その研究生の90%以上は、「学部」ではなく、「大学院」入学を希望していることからすると、専門書を読みこなす能力だけでなく、教室での口頭発表の能力やレポート作成能力も求められ、日常使用言語以

上の高度な日本語運用能力が要求されていると考えねばならない。

日本で生活していくためにも日本語の勉強は、本人が努力することが基本であることは言うまでもないとしても、来日して日の浅い留学生一人の個人的な努力のみでは、語学の習得はかなりの時間を要すると思われる。

2002年4月に別府が留学生担当として着任したとき、院生の素晴らしい日本語力に驚嘆すると同時に、来日して1年が過ぎているのに、ほとんど会話体をなさない中間言語使用者に留まっている者もあり、その差の大きさに驚き、日本語指導に悩むこととなった。

とりあえず、教育学部に留学してくる研究生の日本語力を、初級と中級に分けて日本語の指導をすることとし、上級のレベルの院生に対しては個人的な講座とし、専門書の読解と論文指導をすることにした。

しかし、初級と中級の留学生の実力は思うようにはなかなか伸びないものだということが分かった。その原因の一つに、留学生は結局、せっかく日本に来ていながら、日本人の友達を作るよりも、同国人同士で会話するほうを選んでいるということがあつたようである。

留学生が、日本人学生と知り合い、語学を通してお互いの文化を学ぶことができたかどうか、と思っていたときに、「日本語学習サポート」を本格的に立ち上げようという話があり、大いに賛同し、03年度から早速活動を開始したという次第である。

3. 日本語学習支援体制「日本語学習サポート」への取り組み

本学には、人文学部、教育学部、医学部、工学部、生物資源学部の5学部があり、大学院には人文社会科学研究科（修士課程）、教育学研究科（修士課程）、医学系研究科（修士・博士課程）、工学研究科（博士前・後期課程）、生物資源学研究科（博士前・後期課程）がある。日本語学習支援体制「日本語学習サポート」は、大学・大学院入学前の留学生を含め、全学の希望する留学生に対し日本語学習支援を行うものである。

本項では、①日本語学習のサポート内容、②「日本語学習サポート」プログラムの主な活動内容として立ち上げから現在までの体制作り、③日本人学生の日本語指導のための勉強会、そして、④日本語学習サポートを行うにあたっての規則についての4点を中心に述べ、「日本語学習サポート」に関する取り組みやその具体的な活動について報告したい。

3-1. 「日本語学習サポート」内容

「日本語学習サポート」は、日本語の語学面でのサポートを希望する本学の留学生一人に対し、本学の日本人大学生・大学院生を「サポート・ボランティア」とする一名または二名がペアとなり、双方が週1回（90分）時間を決め、留学生が希望する内容の日本語を手助けするというものである。

この「日本語学習サポート」は、留学生に対して専門教科の修学を支援したり、生活面での支援を行ったりするものではない。学習面での日本語の語学支援を行うことを本来の目的とする。2003年7月現在、33組の学習サポート・ペアが組織され、その活動にあっている。初級レベルのペアは12組、中上級レベルのペアは21組である。

そのサポートする内容については、各留学生の希望によって異なり、ある者は会話練習であったり、ある者は漢字の練習、レポートの作成、読解や聴解のスキルアップであったりする。最終的にサポート内容に関する決定、教材選択とその準備、指導方法にあたっては、教官の方から日本人学生に指示を行う。

留学生と日本人学生による個々のサポート内容については、下記の通りである。

表1. 日本語学習サポート例（2003年7月現在）

(1) 初級グループ

留 学 生	サポーター	時 間	内 容
SA (バングラディシュ)	KF (教育学部)	月1コマ目	Basic Kanji Book1 (凡人社) 留学生センターテキスト
SS (タイ)	TY (医学部)	月昼休み	Basic Kanji Book2 (凡人社) 留学生センターテキスト
MR (バングラディシュ)	KK (生物資源)	月昼休み	Basic Kanji Book2 (凡人社)
YE (ギリシャ)	MC (教育学部)	月火昼休み	会話
SO (タンザニア)	EM (医学部)	月16:00~17:30	Basic Kanji Book1 (凡人社) 留学生センターテキスト
CK (マレーシア)	EM (医学部)	火昼休み	Basic Kanji Book1 (凡人社) 留学生センターテキスト
OT (中国)	KN (人文学部)	火18:00~19:30	会話、留学生センターテキスト
GM (アルバニア)	NM (生物資源)	水14:00~15:30	会話、留学生センターテキスト
RK (中国)	NA (生物資源)	水4コマ目	読解テキスト
SY (タイ)	OS (生物資源)	金4コマ目	会話、留学生センターテキスト
KC (中国)	AK (生物資源)	金4コマ目	読解テキスト
SS (中国)	TK (生物資源)	金18:00~19:30	会話、留学生センターテキスト

(2) 中上級グループ

留 学 生	サポーター	時 間	内 容
SN (中国)	TK (教育学部)	月4コマ目	課題・レポート指導
KS (中国)	MK (人文学部)	月18:00~19:30	新聞読解
TA (中国)	SY (人文学部)	火2コマ目	検定試験問題

全学部を対象とした「日本語学習サポート」の取り組み

留 学 生	サポーター	時 間	内 容
OY (中国)	OY (人文学部)	火・木昼休み	英語暗記
OK (中国)	OM (生物資源)	火 5 コマ目	課題・レポート指導
HH (中国)	SS (人文学部)	火 5 コマ目	現代日本語コース中級 1 (名大)
KS (中国)	TY (人文学部) NS (医学部)	火 18 : 00～19 : 30	新聞読解
OR (中国)	KS (生物資源)	水 3 コマ目	現代日本語コース中級 1 (名大)
BY (中国)	SM (人文学部) TN (生物資源)	水 3 コマ目	新聞読解
NG (中国)	HN (人文学部)	水 3 コマ目	新聞読解
TK (中国)	SR (工学部)	水 4 コマ目	課題・レポート指導
KK (中国)	TA (教育学部)	水 4 コマ目	課題・レポート指導
CK (タイ)	SM (医学部) TM (医学部)	水 5 コマ目	ペアで覚えるいろいろなことば (武蔵野書院)
SK (中国)	HY (人文学部)	木 5 コマ目	新聞読解
KR (中国)	FE (人文学部) KN (人文学部)	木 5 コマ目	新聞読解
TG (中国)	SH (医学部) IN (医学部)	木 18 : 00～17 : 30	新聞読解
KR (中国)	YN (生物資源) KN (人文学部)	金 3 コマ目	現代日本語コース中級 2 (名大)
RB (中国)	SM (人文学部) HC (人文学部)	金 4 コマ目	なめらか日本語会話 (アルク)
DH (中国)	MY (教育学部)	金 4 コマ目	課題・レポート指導
OT (中国)	SK (人文学部)	金 5 コマ目	留学生の日本語・読解編 (アルク)
TB (ベトナム)	SM (人文学部) SM (人文学部)	金 5 コマ目	新聞読解

3-2. 「日本語学習サポート」プログラムの主な活動と日本語指導のための勉強会

この全学部向けの「日本語学習サポート」プログラムの立ち上げにあたり、全学部の掲示板や本学ホームページで紹介し、日本語サポートを希望する留学生およびボランティアで日本語の学習支援を行ってみたいという日本人学生を募った。サークル案内を見て集まった多くの新生生には既にサポーターとして1～3年間の経験を積んだ先輩学生が繰り返し

説明に当たった。日本人学生の入会にあたっては、申込書を提出してもらい、サポートができる時間、サポートを行いたい留学生のレベル、サポート・ボランティアで語学支援の他にやってみたいことについて記入してもらった。留学生用の申込書には、サポートを希望する時間、希望する学習サポートの内容、サポーターへの要望（性別、専門）を記入してもらった。そして、留学生と日本人学生とのペアをより効果的に組み合わせるための参考として教官による面接を行った。また、サークル活動の一環として行う交流パーティーや見学旅行は、「日本語学習サポート」プログラムに参加する日本人学生と留学生とがお互いに学習サポートの体験を紹介し合い、意見の交換を行うなど、大学では数少ない日本人学生と留学生が交流する場となっている。

「日本語学習サポート」に関する現在までの主な活動は下記のとおりである。

表2. 「日本語学習サポート」プログラムの主な活動（2003年度）

前期：	
4月10日	日本語学習サポートの紹介（留学生対象）
4月22日	日本語学習サポートの紹介（日本人学生対象）
5月1日	日本語学習サポート：交流パーティー（留学生・日本人学生対象）
5月26日	勉強会1：初級の教え方1＜動詞の活用＞（日本人学生対象）
6月10日	勉強会2：初級の教え方2＜文字・発音＞（〃）
6月26日	勉強会3：中級の教え方3＜語彙＞（〃）
7月11日	勉強会4：中級の教え方4＜文法＞（〃）
後期：	
9月26日	日本語学習サポートの紹介（留学生対象）
10月24日	日本語学習サポート：交流パーティー（留学生・日本人学生対象）
10月22日	勉強会5：中級の教え方1＜文法・読解の指導＞（日本人学生対象）
11月5日	勉強会6：上級の教え方2＜文法・語彙の指導＞（〃）
12月3日	勉強会7：上級の教え方3＜論文・レポートの指導＞（〃）
12月14日	県内研修（上野市・多文化共生のフォーラムに参加）（〃）
1月7日	餅つき（留学生・日本人学生対象）
2月12日	卒業生歓送会
＊ 毎週水曜日昼休み サポーター・ミーティング	

3-3. 日本人学生の日本語指導のための勉強会

「日本語学習サポート」にサポーターとして参加する日本人学生は、日本語教育に関する知識や経験がない者がほとんどである。従って、日本人学生が留学生に日本語をサポートする際に、基本的な知識を最低限知ってもらう必要があった。そこで、本プログラムでは前期に4回、後期には3回と、授業の少ない18：00から19：30までの時間を設定し、

日本人学生を対象に日本語指導のための「勉強会」を行った。毎回十数名の参加があった。勉強会の内容については、表3に示した。また、勉強会では、「日本語学習サポート」の活動上で起こっている問題等について日本人学生同士で話し合う機会を設けた。後期には学外からの聴講者も数名加わった。

表3. 日本人学生を対象にして行った日本語指導のための勉強会の主な内容

	勉強会	主な内容
1	初級の教え方1 ＜動詞の活用＞	国語教育と日本語教育の違い、「ます形」「た形」「ない形」「て形」「辞書形」など留学生の誰もが日本語学習で使う文法用語の指導、動詞の分類、文型練習について実践的な指導を行った。
2	初級の教え方2 ＜文字・発音＞	日本語の文字・表記の特徴、ひらがな・長音・濁音の表記上の主な留意点、漢字圏と非漢字圏の漢字習得上の違いについて述べ、さらに、母語話者別に発音の誤用例をテープで聞いてもらい、幾つか発音矯正の方法を紹介した。
3	中級の教え方3 ＜語彙＞	日本語の語彙を初級・中級・上級の学習レベルに応じて段階分けし、さらに使用語彙と理解語彙に二分して、学習者の負担を軽減すること、少ない語彙量でいかに効率よく表現したり理解したりするかが大切であることを指導した。
4	中級の教え方4 ＜文法＞	中上級の学習者に日本語を教えることは自分自身の啓発と発見の機会と捉え、学習者に合った日本語を使うことから、自分自身の言語行動を見直すことを重点的に講義。音読や聞く、話す練習の際の留意点、説明での留意点など。
5	初級・中級の教え方1 ＜文法・読解の指導＞	初級、中級、上級レベルの読解において、レベル別指導について述べ、レベル別教材のあり方、実際の教材を紹介した。また、精読、速読（スキミング、スキャニング）、予測など、読解教材例を提示し、実践的な指導方法を述べた。
6	上級の教え方2 ＜文法・語彙の指導＞	特にアジア系の学習者にとって学びにくい最近の外来語を取り上げ、その扱いと位置づけについて考えた。また、文法事項として、しばしば誤用の見られるアスペクトについて取り上げ、基本的な問題点を具体例から探求した。
7	上級の教え方3 ＜論文・レポートの指導＞	論文やレポートを指導する際の基本的知識。1) 感想文、手紙との違い 2) 必要な文体、文法、書式（記号の用法、文献の引用例を含む） 3) 必要な論理の組み立て方や文章の書き方（具体的な論文・レポートの例を読んで学ぶ）

3-4. 日本語学習サポートを行うにあたっての規則

日本人学生にとっても留学生にとっても、単に日本語の習得とその指導ばかりでなく、異文化体験など多くの点で、このプログラムを通して得るものは大きいと考える。そのた

めにも、「日本語学習サポート」の諸活動を行うにあたって、メンバーが守るべき基本的なルール作りが必要であった。そこで、下記に示すように日本人学生側の方にこれらの規則を提示し、留学生への日本語学習支援であることの認識を高めてもらうことにした。なお、このプログラムは、サークル「てらこや」として大学に登録しており、教官の指導の下に自治組織を有するものである⁽⁴⁾。また、勉強会や行事等の連絡の必要上、日本人学生および留学生のメーリングリストの充実も図られることになった。

日本語学習サポート・ボランティアの心得

1. 学習サポート時間は、基本的には週に1コマとし、平日の授業時間（8：50 から 17：50 まで）内とする。それ以降の時間帯については、教官の指示に従うこと。
2. 学習サポートの場所は、基本的に指定された場所で、原則的に届け出た学習時間に行うこと。
3. サポートの期間は、基本的に1年間とし、新年度においては改めて組み合わせを行う。
4. サポート内容については、適宜顧問（教官）に相談する。
5. できる限り週1 ミーティングに参加すること。
6. できる限り勉強会やイベントに参加すること。
7. サポート上で何かトラブルや相談事があれば、顧問（教官）に相談すること。
8. 連絡は、基本的にはメーリングリストで行うので、注意すること。
9. 個人的な情報は、本人の許可なく外部に流さないこと。
10. 個人的な理由で、活動が続けられなくなった場合は、必ず顧問（教官）に連絡すること。

4. 「日本語学習サポート」プログラムの取り組み－問題点と今後の課題－

現在、「日本語学習サポート」プログラムは、確実に留学生の中に浸透しつつある。というのは、日本語学習サポートに参加し日本人学生と共に学びたいという留学生が増えてきており、日本人学生による供給をはるかに上回っているからだ。このプログラムをどのように維持し、発展させていくかは今後大きな問題である。ここでは、「日本語学習サポート」プログラムの現状における問題点を幾つかあげ、今後の方向性を探り、検討すべき課題について明らかにしておきたい。

4-1. 日本人学生における問題点

このプログラムに参加してくる日本人学生は、留学生と異文化交流を図ってみたいという動機で参加する学生が多い。このプログラムに参加することによって、3-4. で述べた

ようにサークル活動に加わることになるが、日本人学生の全体的傾向として、週一ミーティング、勉強会、交流パーティーなど、留学生へのサポートよりもサークル活動を中心に考える者、サークル活動には参加せずに留学生の日本語サポートに専念したいという者、留学生へのサポートばかりでなく学生役員という形でこのプログラムの活動全般に積極的に参加していこうとする者の3タイプが見受けられる。「日本語学習サポート」は、サポートの活動内容としては個々に活動が孤立化しがちであるが、指導する側の立場としては、日本人学生同士の横のつながりを強化し、留学生への日本語学習サポートの輪を広げていけるようにしていく必要がある。

次に、日本人学生の日本語指導能力の向上をどう図るかである。日本語能力試験1級や2級を目指す留学生や初級レベルの留学生をサポートする日本人学生の中には、指導の限界を感じている学生もいる。表2や表3で示したように、日本語の指導に関する勉強会を開いているが、出席したくても実験やアルバイト、サークル活動等で出席できない日本人学生が多いため、無理なく日本語指導能力が向上できるような勉強会や研修のあり方を考える必要がある。本来、ボランティアで日本語のサポートをしていきたいという日本人学生を集めるのは難しく、現在の日本人学生の数も決して多くはないが、日本人学生達のその真摯な態度や姿勢は、留学生の学習姿勢にも大きく現れている。

4-2. 留学生の問題点

中上級レベルで学習サポートを希望する留学生は漢字圏の学生が多く、初級レベルでは非漢字圏の学生が多い。最近、初級レベルの留学生が日本語学習サポートを希望するケースが増え、その対応に苦慮している。動詞の活用など初級文法の最も基本的な基礎ができてから日本語学習サポートを行うことが、指導する日本人学生の側から考えて望ましいことである。また、渡日の遅れや専門の授業の関係で留学生センターの授業を取れないでいる初級レベルの留学生など、諸条件の異なる留学生への対応はさらに複雑化するであろう。今後、このような留学生の実態を調べる必要がある。

留学生は、その多くが目指す専門領域や生活形態の違いから、日々の生活の中で孤立化する傾向がある。留学生のこのプログラムの行事への参加度は、サポーターである日本人学生如何に依ることが多いため、サポーターの呼びかけがないと留学生が集まらないことも多い。このプログラム内での留学生の孤立化を避けるためにも、留学生への連絡方法をより整備し、留学生同士の連帯感を強めるよう図っていききたい。

現在、このサポートプログラムに参加している留学生の間では、このプログラムの評価は高い。彼らに役に立っているプログラムであることは、需要の高さや交流イベントへの参加人数の多さからも窺うことができる。今後も留学生の現状を把握し、このプログラム

に対する留学生の声を大切にして、指導へと還元していきたい。

4-3. 指導体制の問題点

大きな問題点として、現体制のままでは学生の自主的なサークル活動以外の部分においては、各学部での違いはあるものの、やはり教官の負担が大きくなる可能性があることが挙げられる。現在学習サポート活動の企画、教材資料の準備や整備、留学生とサポーターの組み合わせと紹介、各ペアの学習内容に関する助言・指示やサポート進行状況の把握は、すべて教官が行っている。学習サポートのペアが多くなるほど、その負担は大きくなることが考えられる。役員会、ミーティング、夕食会、交流パーティー、日帰り研修など行事等の企画や日本人学生・留学生への全体連絡は、サークル活動の一環として日本人学生による自主的な運営によって継続され発展していくべきである。しかし、特に各ペアで行っている学習内容に関する助言・指示やサポート進行状況の把握は、教官以外に行うことができない内容であり重要な責務である。従って、きめ細かな日本語の学習支援体制をしっかりと築いていくには、これらの問題への真摯な取り組みが必要不可欠である。今後、サークルとして学生の一層の自主的な運営に委ね、教官が専門家として必要な役割を果たすというスタイルの連携を進めていけないかという点についても検討する必要がある。

そして、これまで見てきたように、特に初級レベルの留学生からのサポート希望が増加傾向にあるという現状を踏まえ、基本を押さえた学習指導体制をより一層充実させていく必要がある。留学生へのサポートをリードしていくのは通常日本人学生の方であるため、日本人学生の日本語指導能力の向上、日本人学生が留学生を支えていこうとする根本的な動機付けをより高く維持させていくことが重要であると思われる。しかしながら、日本人学生はあくまでもボランティアであるため、無理な負担はさける必要がある。

そのためにも、今後は日本人学生や留学生に対しアンケート調査等を実施し、しっかり現場での声を聞き、このプログラム全体の内容を今一度検討してみることも重要である。また、勉強会や研修、交流活動を充実させる意味においても、経費獲得は必要不可欠な問題であると言える。

最後に、このプログラムは、日本語の学習支援活動を通して、留学生と日本人学生の異文化交流ができ、大学全体で留学生を支援する輪が広がっていくものと言っても過言ではないプログラムである。この「日本語学習サポート」をどう維持し、発展させて行くか、ボランティアの学生メンバーと共にさらに検討を加え、日本語を通してより大きな留学生支援体制の輪を広めていきたい。

注

- (1) 大使館推薦による国費研究留学生プログラム。留学生センターで半年間の大学院入学前予備教育を受けた後、本学または他大学の大学院へ進学する。
- (2) 日韓両政府の奨学金による留学生のためのプログラム。まず半年間を韓国の慶熙大学で、次の半年間を日本の大学で日本語や専門教科に関する予備教育を受け、各大学の理工系学部に進学する。現在6名の日韓理工系学部留学生が本学で学んでいる。
- (3) 母国で日本語・日本文化に関する分野を専攻している学部生のためのプログラム。1年間、日本語能力の向上を図り、日本の文化や社会に関する研究を発展させる。本学では今年度より始めたプログラムで、3名の日本語・日本語文化研修留学生の受け入れがあった。
- (4) サークル名は、1998年から人文学部留学生相談室を拠点に活動を続けていた「てらこや」（経緯については2-2. に記述）の名を引き継いで使用することとした。

参考文献

- 横田雅弘（1999）「留学生支援システムの最前線」『異文化間教育』13号、pp. 4-18.
- エレン・ナカミズ（1999）「留学生支援システムとしての日本語教育」『異文化間教育』13号、pp. 51-59.
- 坪井 健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育」『異文化間教育』13号、pp. 60-74.
- 早矢仕彩子（2002）「留学生日本語学習支援ボランティアグループ「てらこや」の活動と意義」『人文論叢』第19号、pp117-120.